

「わくわく★たいけんフェスタ in イオンモール橿原」

- [主催] 国立青少年教育振興機構 [主管] 国立曽爾青少年自然の家
[協力] 一般社団法人そこのわ GLOCAL、天理大学、絵本専門士の皆様、
関西学院大学、株式会社マーブル、近畿地区青少年教育施設協議会、
国立諫早青少年自然の家
[期日] 令和8年2月14日(土)・15日(日) 2日間
[場所] イオンモール橿原(奈良県橿原市)
[対象] 親子 500名(想定) [参加] 親子 884名
[担当] 福田卓(管理係)、千葉博仁・西田早織(事業推進係)、
山本祐子(総務係)、秋山 洋(所長兼次長)



1 趣旨

体験活動の機会になじみのない親子に対し、体験活動の楽しさ・大切さを理解いただくとともに、継続して体験活動の機会に参加する意識の醸成と、継続した意識を持てるように、情報の提供機会の確保・きっかけを作る

2 趣旨・目的を達成するための手段(委託事業としての与件を含む)

- ① 体験活動に馴染みのない方を想定し、大型商業施設等での不特定多数の方への提供
- ② 自然体験だけでなく多岐にわたる体験を多種連携団体を巻き込み同時提供
- ③ 体験した者に対するアンケートでの影響調査(直後、1か月後)の実施
- ④ 出展連携団体と部会を構成し、3回ほど開催し協議して進める
- ⑤ 今回の体験で終わりではなく、その後の体験活動への継続した意識の情勢ときっかけを持たせる
- ⑥ 運営の効率化と、アンケート回収率向上及び今後の情報提供に繋げるLINEシステム導入

3 プログラム展開

2日間両日とも 10:00～17:00のブース運営

出展内容

- ① 国立曽爾青少年自然の家 (木工クラフト、丸太の輪切り体験)
- ② 一般社団法人そこのわ GLOCAL (オリジナルアクセサリー作り)
- ③ 天理大学 (ウェイトリフティング競技体験)
- ④ 絵本専門士 (絵本読み聞かせ、絵本の紹介・相談会)
- ⑤ 関西学院大学×株式会社マーブル (防災(地震)MRアプリ体験)
- ⑥ 近畿地区青少年教育施設協議会ユースプロジェクト (バスボムクラフト)
- ⑦ 国立諫早青少年自然の家 (タブレット活用の防災クイズラリー)



4 成果と課題 ○成果、●課題

- 参加者数が想定を大幅に超える実績(500名想定→884名実績)があり、多くの家庭に体験を届けることができた。
- アンケート回収を150通と大幅な声をいただいた。(1か月後のアンケートは今後実施)
- 事業後に曽爾自然の家のイベントへの参加者があり、その後の体験に繋がった事例となった。
- LINE登録者が約200家族となり、今後の体験活動のイベント情報等の発信に繋げるきっかけを構築した。
- 出展者同士のつながり構築と、出展者の事業展開の施行や参加者の反応・データ分析の場とすることができた。
- 商業施設の出展経費が高額となった(2日間90万円)。今後の継続性を考慮し、予算に合わせ規模設定が必要。
- 人出が少ない時間帯があったことや、終了後の片付け等に負担があるため、出展時間を短縮することも必要。
- 絵本ブースの環境に配慮し、相互干渉を避け会場を分散した。体験ラリーの効果を活用し相互のエリアの行き来もねらったが、結果、完遂する親子も少なく相互の行き来も少なかった。またエリアが離れていることで、スタッフも完全分断となり、エリアごとの責任者の配置などで効率的な運営が出来なかった感がある。
- 事務局5名で主担当を分担したが、初事業であったため作業量・スケジュールの見通しが十分でなく、イベント直前に作業が集中したことや、スタッフ個々の準備状況が共有しきれない状況があった。

5 ふりかえり(出展者、スタッフの声、参加者の様子・具体的なエピソード)

<出展者・スタッフの声>

- ・各ブース運営者全員が、参加者との会話、子供たちへの声かけやスタッフが楽しむ姿をみせるなど、体験と人をつなぐコーディネーターとしての姿勢を大事にいただいたことで、参加者が楽しんで体験していただけた。
- ・「すべての青少年に体験活動の提供」という機構の使命に合致しており、国立に求められる役割の一つと感じた。
- ・メインが買い物であることから、体験ラリーコンプリートのハードルは高かった(コンプリート者10組程度)。
- ・参加者の年齢、障害、興味関心・こだわりに応じて柔軟な対応が必要と感じた。
- ・2日目にブースを外に出し来場者を増やすことができた。入口を分かりやすく、楽しい雰囲気伝えることが大事。
- ・2日目撤収に想定以上の時間を要した。レンタカーの返却なども含め、2日目終了時刻は早めてもよいと思う。
- ・丸太切りでは“切る体験→つくる体験”という連続性が生まれ、子どもたちが達成感を感じやすく、親子の会話が広がった。
- ・今回の体験後にどうなってほしいかというイメージを持ち、ブース運営をできたかが重要。次の体験機会へ導線を

全体で意識したいと思った。

- ・学生の呼び込みが逆に警戒されている様子もあり、イベント自体が最初に見つかる安心材料・仕掛けが必要。
- ・絵本ブースも他ブースと一緒にすることで、「いくつかのブースの中のひとつ」という認識が参加者に伝わり、他のブースに興味があって来て、横の絵本にも手がのびるという効果も期待できたように感じる。
- ・「自然の家のスタッフ + 絵本」のコラボでプログラムを組み立てれば曾爾をもっと周知できたか。
- ・著作権料の壁は高かった。
- ・書店と連携しおはなし会で読んだ絵本のコーナーを設置してもらうことで、書店との連携が構築できた。

<参加者の様子・具体的なエピソード>

○体験していた子供をみて、その保護者が「イオンに来てこのイベントを知り参加した。午後には塾に行かなければいけないが、体験している子供を見てるととても目を輝かせて楽しそうにしている、良かれと思って塾での勉強をさせてきたが、こういう体験が子供の成長にももっと必要なことじゃないかと感じています」という声があった。

○自由度が高かった木工クラフトだったからか、「ほら、こんなの作ったよ!」と見せてくれる子が多かった。「このどんぐり達は家族やねん」「ハンバーグ作ったよ!木の輪切りにグルーガンで垂らしてソースにしてん!」などこだわりポイントを沢山教えてくれていた。

○見本のように作りたい、と見合った材料を選ぶ様子、逆に、見本にはないものを作りたいからその意思を分かっほしいと保護者に主張する様子、材料を色々逡巡しつつ選んで取っている様子、親子で話しながら作る様子、兄妹で話しながら作る様子、黙々と作っている子どもを保護者が見守る様子などさまざまな様子を見ることができた。

○丸太が切り落とせた瞬間には、ぱっと表情が明るくなる子どもたちが多く、その達成感がよく伝わってきた。さらに、切った丸太を手にクラフト体験のブースへ向かう姿から、体験が連続してつながっていることへのワクワク感が感じられた。また、きょうだいで協力しながら頑張る姿や、先に切り終えた子が、まだ切っている子を横で応援するほほえましい場面もあった。「手伝おうか?」という親の問いかけに対し、「自分でやる!」と最後までやり抜こうとする子どもの姿も印象に残った。

○ウェイトリフティングは、上がるかどうかドキドキの固い表情だった男の子も女の子も、いざ1.5kgを持ち上げてみた後は得意げに何度も持ち上げていて、以前聞いた「子供たちは安心のコンフォートゾーンと、ちょっとドキドキのストレッチゾーンを行き来する」という話を思い出した。

○小さなお子さんがアクセサリーを完成させた時の嬉しそうなお顔をみると大変感動した。お子さんによって色使いのこだわりや時間のかけ方、手先の器用さも違うため、指導側も柔軟に対応する必要があると感じた。印象的だったのは保護者の方が自分のお子さんの知らない一面を体験を通じて気づくような場面が何度かあった。

○バスボムづくりで、親も一緒に体験されるかお声がけした時、子どもが「一緒にやろう」と誘っている姿を見ることがあった。初めはスマホでゲームしていたお父さんが一緒にバスボムを作っていくにつれ、親子で笑顔になり、楽しそうにどうやって作るか会話をしながら進めていたのが印象的であった。

○子供が2つ目を作りたいと声をかけてきた。その理由がここにはいない弟のためということ。また待っている祖母のために。という理由であったことにほほえましさを感じた。

○防災ラリーを体験していただいた子どもたちの多くが、他のブースを回った後、学生に作品を見せに来てくれており大変和やかな雰囲気でした。

○骨を怖がる子もいた。だが、まつぼっくりならおもしろそうだ、比較的興味深いと思って、大王松のまつぼっくりを手取る子どもがいた。それぞれの興味関心があるため、複数の入口になるツールは、体験の機会につなげる重要な要素だと感じた。

○『きんぎょがにげた』(2~3歳女児)何度も繰り返し読んであげるうちに、打ち解けていく。保護者の方と、同じ絵本を何度も楽しむことも小さな子ども特有の『確認する喜び』、『自分に向けて声を出してくれる人がいる喜び』であるとお伝えする。

○『いちご』(4,5歳くらいの女児)声をかけて一緒に椅子に横並びに座り読む。読むというより、絵を見ながらお話ししてコミュニケーションをとる。終わっても初めのページから何度も楽しむ。他の本も取りに行き何度も読んだ。

○『パンダ銭湯』(4歳男児)何度も一緒に楽しみ、最後は書店で購入。その報告に会場まで来てくださった。保護者とのお話の中で、買い物に来て1冊の絵本と出会い、購入し手元に置いてくれたという小さな体験につながった。

○『ごぶごぶ ごぼごぼ』(0歳男児)ベビーカーの乳児に読んで読む。何度も読んでいくうちに、手を伸ばして、体を前のめりになり、穴に手を突っ込んだり、自分でページをめくったりする。最後には、私の声に合わせて、喃語も出てきた。お母様も絵本の力に驚かれていた。

○子供たちは「クイズ」というワードに興味を持って体験したいという子が多かった。親子で参加しても、子供たちがタブレットを持ちながら走って、親御さんを置いていってしまうくらい夢中になって取り組んでくれていました。

6 活動の様子



絵本とあそび!の読み聞かせ



バスボムクラフト



ウェイトリフティング競技体験



防災クイズラリー